

[第32回学術集会 シンポジウム2]

ふたりの子どもの親として

北海道自閉症協会札幌分会 元副会長

野田 孝子

私には二人の息子がいる。長男は発達障害の研究者であり、次男は発達障害当事者である。二人の子育ては、それぞれ異なる困難と喜びに満ちていたが、彼らが私を「親」として育ててくれたと実感する。この感覚は、多くの親に共通するものではないだろうか。

次男に対する子育ては、自らの経験だけでは想像できず、我が子でありながらもわからないことばかりであった。しかし、発達障害への理解が進む時代の流れの中で、多くの支援者と出会い、つながり、親子ともにサポートを受けながら歩んできた。一方、2歳で兄となり、小さいながらも次男を支えながら成長する長男に対しては、気持ちに十分に寄り添えず、彼のもつ力に甘んじてきた後悔が残る。幼少期、学齢期、思春期と、どの時期を振り返っても、我慢を強いられる長男を思い出す。あの時、長男は何を思い、どのように折り合いをつけていたのだろうか。また、これからの生活にどのような想いを抱えているのだろうか。知る必要がありながら、知ることが怖くもある。

今、親として、せめてこれから訪れるであろう親亡き日にむけて、悔いなき準備を整えたいと思いつつ、未だ不十分であり課題は尽きない。

本日は、発達障害のある子とそのきょうだいへの育児経験から、親としての葛藤やきょうだいへの影響、また、きょうだい支援の重要性について実体験をもとに考えたい。

最後に、本シンポジウムの機会を与えてくださった大会長の今野美紀先生、座長の澤田いずみ先生、松澤明美先生に、心から感謝申しあげる。

略歴

- ・2007年-2013年 北海道自閉症協会札幌分会役員
(2011-2013年副会長)
- ・2007年 日本自閉症協会主催ペアレント・メンター養成講座受講
北海道ペアレント・メンター空知地区リーダーメンター
- ・現職 看護専門学校専任教員